

鯨 研 通 信

第 307 号

1977年 3 月

財団法人 鯨類研究所 〒 135 東京都江東区越中島 1 丁目 3 番 1 号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



マッコウクジラ捕鯨の歴史

(18 — 19 世紀)

A. A. ベルツィン著

海洋水産資源開発センター 奈須 敬二 訳

訳者はしがき

本論文は、A. A. ベルツィン著 "マッコウクジラ" の第17章である。本著は、マッコウクジラに関する分類学、形態学、分布、主な生物学的特徴および捕鯨の5節から構成されたぼう大な綜述書である。その内容のうち、今迄3回にわたり分布(本誌第291号及び298号)と回遊および分布のパターン(本誌第299号)を選び翻訳したが、今回の"捕鯨の歴史"はその最終回である。

1770年に、大西洋はニューファウンドランドからフォークランド諸島に及ぶ広範囲の海域でマッコウクジラを捕獲していたアメリカ捕鯨船団は、125隻に達していた。英国は、この採算性の高い捕鯨業に1785年参加し、そして、1789年ロンドンを出港した捕鯨船は喜望峯をまわり、インド洋横断の大航海を経た後、太平洋で操業をはじめ、大量の鯨油を生産して掃蕩した。それとほぼ時を同じくして、フランスとポルトガルもマッコウクジラ捕鯨を始め、1789年にはインド洋においても捕鯨が行なわれるようになった。

太平洋における捕鯨は、チリー沿岸、ペルーおよびガラパゴスで急速に発展し、マッコウクジラの宝庫は好漁場となった。Harmerの資料によれば、マッコウクジラの捕鯨は、1802年にニュージーランド海域で始まっている。1820年にイギリス人は、日本周辺の水域でマッコウクジラの濃密な分布域を発見し、この水域もマッコウクジラの好漁場となった(Townsend, 1931)。そして1835年にはほぼ100隻が同水域で操業をしていた。インド洋における捕鯨は近年すでに大規模に組織されてきたが、その発展のピークは1837年に

あったものと考えられている。

1820~1850年は黄金時代であった。1842年における捕鯨船の総数は824隻に達し、そのうち594隻はアメリカに所属していた。その後アメリカ船団の隻数は729隻に達したが、Harmer(1928)の見解によれば、マッコウクジラの捕鯨に使用されていた隻数を確認することは困難である。ところでハワイ諸島は重要な捕鯨中心地となった。例えば1846年には600隻以上がホノルルに入港した(Slijper, 1962)。そして、1837年にアメリカの捕鯨船団は127,000バレルのマッコウ油を生産した。Zenkovich(1952)の計算によればこの産油量に相当するマッコウクジラは2,100頭捕獲されたことになる。Scammon(1874)によればこの捕鯨全盛時代には最高3,800頭のマッコウクジラが毎年捕獲され、一方Slijperの資料(1962)は1842年の一年間で捕獲されたマッコウクジラは10,000頭に達していたことを示している。

1846年からアメリカの捕鯨船は繁殖頭数以上の鯨を乱獲した結果、主としてマッコウクジラの資源が減少したために隻数を減らされた(Harmerの結論)。Boschma(1938)とTomilin(1957)は、鯨の資源状態は主な捕鯨漁場が繁殖海域に形成されていたため、次第に悪化したものと考えている。

この研究者たちの結論を疑う余地はないが、私達はこの数年マッコウクジラの資源がそれ以前の鯨漁場においてのみ枯渇していたという事実を立証すべきである。何となれば、メス鯨の分布海域を含む北半球と南半球に広範囲にわたり鯨が生息する海域で捕鯨が行なわれていなかったからである。

おそらくSlijper(1962)が資本家と人的資源を魅きつけたアメリカの綿糸工業が急速に発展したことを

考えているのは正しいであろう。

1849年初頭多くのサンフランシスコの船乗りたちは“ゴールド・ラッシュ”に運をかけた。加えて多数にのぼる船が南北戦争の間に失われ、そしてついに1859年に鯨油がペンシルバニアで発見され、後に鯨油は市場からマッコウ油や鯨蠟を駆逐しはじめた。

Harmer (1928) は1810年から1880年の間に、アメリカの船団によって生産されたマッコウジラ鯨油の量を第1表のように示している。

第1表 マッコウジラ鯨油の生産量

期 間	マッコウジラ鯨油の生産量 (10 ³ トン)	期 間	マッコウジラ鯨油の生産量 (×10 ³ トン)
1810—1820	788	1850—1860	4,464
1820—1830	3,884	1860—1870	2,772
1830—1840	7,011	1870—1880	2,179
1840—1850	6,655		

Harmer はその後の年代における捕鯨業が衰退傾向をたどり始めたことを報告している。特にアメリカの船団によるマッコウジラ捕鯨はほとんど休漁状態となり、1858年アメリカの捕鯨船68隻が総額百万ドルの損害をこうむった (Zenkovich, 1952)。

この年代に (Townsend の図, 1931, 1935) ベルーからマーケサス諸島の海域は太平洋における主要な鯨漁場の海域であった。すなわち、それらの海域は大西洋における藻海 (サルガッソシー)、南アメリカの沿岸沖30°S~50°Sおよびアンゴラ沖 (アフリカ) に相当した訳である。Townsend はさらに主な鯨漁場の海域としてケーブヴェルデ (Cape Verde) 諸島、アゾレス (Azores)、セイシェル (Seychelles) さらに日本海およびその他のいくつかの海域をあげている。

マッコウジラを対象とした捕鯨がいたるところで衰微し、また数ヶ所の海域における休漁は、20世紀始めの資源の増加を導いたようである。しかし、この時捕鯨は再開されそして近代化されるようになり、1910年初頭におけるマッコウジラの捕獲頭数は1年に1,000頭以上にも達し5年の間に5倍に増加した。

Harmer (1928) によれば1920年代の主な捕鯨漁場は南東アフリカ (Natal) 沿岸沖の海域で、同海域では、1925年に511頭のマッコウジラが捕獲された。また韓国と日本の近海域では1925—1926年に314頭のマッコウジラが捕獲されている。南極海、スペイン

およびポルトガルの沿岸沖、太平洋の南部海域におけるマッコウジラの捕獲頭数は非常に少なく、さらに少いがカムチャッカ沖、コンゴ共和国、アンゴラにおいても捕獲されている。その他の海域ではペルー、ノルウェー、デンマーク、アゾレスにおいて一頭ずつ捕獲されている。

1930年に入るとマッコウジラの捕獲頭数は南アメリカ沿岸沖の太平洋で比較的増加しており、1937年にはペルー (主に) およびチリーで一年間に4,000頭以上捕獲された。日本近海、韓国および千島列島周辺における捕獲頭数も増加した (1930—1931年度漁期に360頭から1934—1935年度漁期には1,000頭、そして1939—1940年度漁期に1,300頭以上)。

カムチャッカとコマンドルスキー諸島沖の北西太平洋ではソビエト捕鯨船団“アリュート号”が最初に操業を始め、10年後に同船団は一年間に200頭のマッコウジラを捕獲していた。

1932—1933年度漁期までの南極海におけるマッコウジラの1漁期捕獲頭数は100頭以下であり、(1929—1930年度漁期には73頭) その半数以上は基地捕鯨で捕獲された。しかしその後の捕獲頭数は上昇しており、1933—1934年度漁期には6倍以上に増加し、そして、1938—1939年度漁期には2,500頭以上に達し、その殆んどが母船式捕鯨により捕獲されている。(訳者注1)

1940年代初期、戦争により捕鯨は完全に衰退し、そして1941—1945年に南極海における母船式捕鯨では一頭のマッコウジラも捕獲されていなかった。マッコウジラ捕鯨は南半球においては、主として沿岸基地によって行なわれ、40年代の上半期に南半球で年間およそ4,000頭を捕獲した。1941—1943年にペルーの沿岸沖で操業していたノルウェー船は8,500頭を捕獲した。下半期には日本を始めとする若干の国において、大規模な捕鯨が再開されその結果として捕獲頭数は著るしく増加した。そして1950年迄世界のマッコウジラ捕獲頭数は年間殆んど10,000頭に近く (1947—1948年には9,850頭)、そしてその半数弱が南極海で捕獲された。

1950年代のペルー海域 (6,300頭) および南極海 (5,500頭) における捕獲頭数は最大値に達した。

この年代に相当数のマッコウジラが捕獲されたにもかかわらず、南極海における全鯨種の総捕獲頭数に対する本種の割合は非常に小さく、その値は平均して

(訳者注1) 当時南氷洋捕鯨は母船式以外にサウス・ジョージア諸島およびケルゲレン諸島などで基地捕鯨による操業が行なわれていた。

8—10%から16%程度である。Zenkovichの計算によれば、南極海において1950年から1954年に18,805頭、1955年から1959年の間に34,658頭のマッコウクジラが捕獲されている。南極海以外にマッコウクジラ漁場として重要な海域は、太平洋においてはカムチャッカ海域(漁期の終りまで1年に1,500頭)、日本(年間1,400頭)および千島列島(漁期の終りまで2,000頭)、インド洋のナタール(Natal)沖海域(年間900頭)および大西洋ではアゾレス海域(年間600~700頭の捕獲)とプロビンス岬(年間200—300頭)などがあげられる。

1954年迄主として太平洋の北部におけるマッコウクジラの母船式捕鯨はわずかに一隻のソビエト船“アリュート号”のみが操業し、年間に約700—800頭を捕獲した。1954年に日本の母船式捕鯨がマッコウクジラの捕獲を始め、1955年に第二回目の出漁をした。(訳者注2)出漁した2船団のうち1船団の捕獲はマッコウクジラに集中し、他の1船団もヒゲ鯨に加えて相当数のマッコウクジラを捕獲した。(訳者注3)

沿岸のマッコウクジラ漁は非常に多くの国々(日本を除く)および多くの海域で操業されたが、その捕獲頭数は極めて低い数字であった。即ち1頭から(ブラジル、ニュージーランド、スコットランド)、70頭前後(アイスランド、ノルウェー、スペイン、モロッコ)程度で、多いところでは1950年代の終りに300頭余捕獲したオーストラリアがあげられる。

1954年にスペイン領モロッコが41頭のマッコウクジラを捕獲したが、その後沿岸基地での操業は中止された。ガボン(Gabon)での沿岸基地は二年の間に(1951年および1959年に)それぞれ146頭および14頭を捕獲したが、この年代に多くの基地が操業を中止した。このように1951年にポルトガルは11頭を捕獲した後マッコウクジラ捕鯨を中止し、1958年にはグリーンランドの基地が26頭を捕獲した後閉鎖した。

1950年代の後半および1960年代の初期に、北太平洋における鯨漁場で強度の母船式および沿岸捕鯨が行われた結果、若干の変化が生じた。すなわち、南および北千島列島の海域はマッコウクジラ漁場としての重要性が低下し、次々と沿岸の鯨体処理場は閉鎖された。さらにカムチャッカ海域、コマンドルスキー諸島および西部アリュシャン列島海域はかつてマッコウクジ

ラを含むあらゆる鯨が豊富に生息していたが、その資源は減少しつつある。これらの海域において、マッコウクジラの濃密な分布域は消滅かつ濃密な群形成期間も除々に減少し、さらに濃密群を形成した鯨資源も減少し、捕獲鯨の体長も低下した。

近年マッコウクジラを対象とした捕鯨は、主に太平洋北部、アリュシャン列島周辺とその南側、アラスカ湾および南アラスカにおいて母船式により操業されてきた。ソビエトの捕鯨母船“アリュート号”、“ダルニポストーク号”、“ウラジオストーク号”および“ソビエツカヤロシア号”がこの水域で操業した。1966年ソ連船の“スラバ号”(それ以前に南極海で操業した)は北太平洋で捕鯨を開始したが、ソビエツカヤロシア号とアリュート号は捕鯨を中止した。

近年の太平洋北部におけるマッコウクジラの捕獲頭数は増加傾向を示している。すなわち、1964年に大量のマッコウクジラがすでに捕獲されており(10,314頭)、一方1967年迄の捕獲頭数は15,469頭に達している。マッコウクジラの大部分は主にソ連の母船式捕鯨により捕獲され、1967年ソ連の捕鯨船団は日本船団の3倍に相当するマッコウクジラを捕獲した(国際捕鯨統計資料)。日本の沿岸沖で捕獲されている非常に多くのマッコウクジラは、主に三陸と北海道海域であり、他の海域での捕獲は非常に低く、まれに年間50頭を越す程度である。最近(1966—67年)マッコウクジラの捕鯨は9ヶ所の沿岸基地で毎年17~18隻の捕鯨船により2,100—2,600頭のマッコウクジラを捕獲してきた。その捕獲鯨のうちメス鯨は5%を超えている。なお、日本鯨類研究所の資料によれば、この水域の一漁期におけるマッコウクジラの捕獲頭数は1957—1958年にわずかに伸びてはいるが、それ以後は漸次減少傾向を呈している。

アジア大陸の沿岸に沿って移動している鯨の頭数は非常に減少してきた。北アメリカの太平洋沖におけるマッコウクジラの捕獲頭数は少なく、1966年に10隻の捕鯨船が3ヶ所の基地でマッコウクジラの操業を行ない、1967年には8隻の捕鯨船がカリフォルニアとブリティッシュコロンビアの2つの基地で操業し、この2年間に捕獲したマッコウクジラは300—400頭であった。

北太平洋では86,000頭のマッコウクジラが14年間(1950年から)に捕獲されたが、その数字はこれらの

(訳者注2) 日本の北洋における母船式捕鯨は、1952年に再開され1953年まで1船団操業したが、マッコウクジラ漁が開始された1954年から2船団が出漁した。

(訳者注3) 1954年はヒゲ鯨のみを対象とした船団とマッコウクジラをも捕獲した船団が出漁したが、1955年からはヒゲ鯨専用とマッコウクジラ専用の船団が出漁した。

海域で捕鯨が開始されてからの全捕獲頭数の73%を超えており (Zenkovich, in litt.)、同海域で近年における世界のマッコウクジラ捕鯨が発祥した。

1960年代初期これらの海域におけるマッコウクジラ捕鯨はヒゲ鯨捕鯨にとり始めての海域である東方へ移動したが、それから再び捕獲頭数は増大し、捕獲鯨の平均体長は低下し、そして全捕鯨漁期間を通じてメス鯨がみられた。

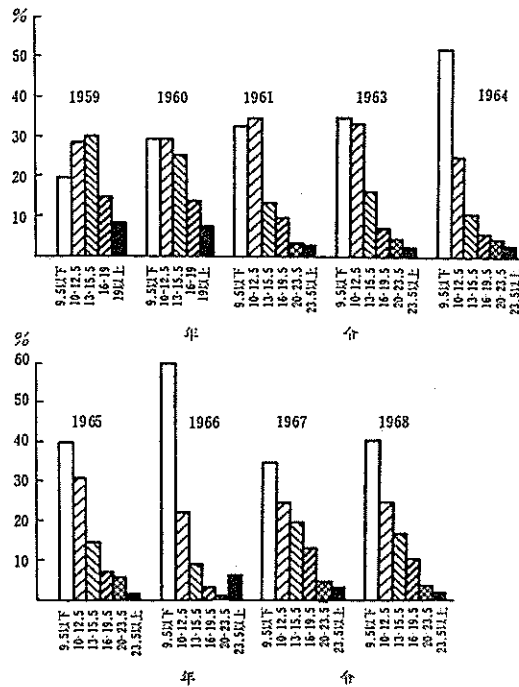
強度の捕獲が行われた結果、太平洋における北東海域の資源状態については、あらゆる指数が悪化の一途を辿っている。日本における研究者の資料によれば、一漁期当りの日本捕鯨船団による捕獲指数は1954年の3.17頭から1958年には3.81頭に増加したが、1959年には3.17頭に低下した。その後1961年までの3漁期はほぼ同一レベルにあったが、1962年には顕著に低下し2.32となっている。

現在筆者は北太平洋で捕獲されたマッコウクジラの年令組成 (歯に形成された縞数による) を調べている。標本は無作為に抽出しているため捕獲鯨の年令組成を反映している。さらに、高緯度における捕鯨は漁期の大部分が選択された特性を有していないため (例えば千島列島海域におけるように)、得られた年令組成はこれらの海域の夏期における資源の年令組成を示していることになる。

1963年以降ソビエト船団により捕獲されたマッコウクジラの年令組成は、大規模かつ広範囲にわたり得られた。そして、1959—1968年の間に北太平洋におけるTINROの研究者 (著者の参加で) により年令が査定されたマッコウクジラは、8,000頭以上に達している。

第1図は1959年から1968年に太平洋の北方水域で捕獲されたオスのマッコウクジラの歯の縞数により査定された年令組成の変化を示したものである。

1961年の終り (Berzin : 1963, 1964 a) に認められた年令組成の低下はその後の漁期にも認められた。最近捕獲されたマッコウクジラの年令組成を1959年に比較すると、最も若い年令群の頭数は或る特定年 (1966) のほぼ3倍となっているが、高年令群の頭数は5倍以上に減少していることが分かった。太平洋の北方水域内における主な鯨漁場の移動は、捕獲鯨の年令組成に影響をおよぼしている。例えば、1966年にいわゆる中部太平洋水域で捕獲された相当数の大型オス鯨は、1966年以前に捕獲されている高年令群の割合と比較して、かなり増加していた。その後においては予想したように、この高年令群の頭数は第1図に示されているように急激に減少しはじめた。



第1図 1959—1968年の北太平洋において捕獲されたマッコウクジラのオスの年令組成

1963年の終りには夏期亜寒帯海域 (北洋) へ来遊するマッコウクジラの緊急なる保護措置の必要性が明らかとなった (Berzin : 1964 a)。厳重な国際規制の不在が北太平洋産マッコウクジラ資源減少の致命的要因かもしれない。太平洋の南半球における (南極海を除く) マッコウクジラは主にペルーの沿岸基地で捕獲されているが、同基地における捕獲頭数は近年確実に減ってきている。すなわち、1961年3,600頭、1964年2,023頭、1966年はわずかに862頭、そして1967年には1頭の鯨も捕獲されていない。チリーの沿岸沖では8隻の捕鯨船が操業し、533頭のマッコウクジラを捕獲したが、この漁場ではさらに捕獲頭数の減少 (1958年の2,300頭から) のほかに、平均体長も12.1mから10.5mに低下している。

南西太平洋において捕鯨船が一隻稼働しているニュージーランドの一つの小規模な基地でザトウクジラの捕獲を中止した結果、マッコウクジラの捕獲頭数が増加した。例えば、1963年までこの基地は実質的にはマッコウクジラを捕獲していなかったが、1963年および1964年にそれぞれ114頭、134頭捕獲している。その後基地での操業はなされていない。

大西洋域は他の海域に比較して、多数の国により南北広範囲にわたり、マッコウクジラを対象とした捕鯨

が行われている。しかし捕鯨基地の設備は不十分であり、かつ捕鯨船も小さい。なお、同海域においてマッコウクジラ捕獲頭数のもっとも多い捕鯨基地は、南東アフリカにあるサルダナ（ケーププロビンス）で、1967年にこの基地で 5 隻の捕鯨船により 630 頭のマッコウクジラが捕獲された。

アゾレスにおける捕鯨は比較的強度に、そして着実にマッコウクジラを捕獲している。統計ではこれらの海域においてもマッコウクジラ捕獲の減少を記録している。即ち、同海域で 1964年に 478 頭、1965年に 379 頭、1967年に 310 頭が捕獲された。また、この海域に近いマディーラでは 1965年に 151頭、1966年に 113頭、1967年に 85頭のマッコウクジラが捕獲された。スペインの 3 箇所における沿岸基地では、3 隻の捕鯨船により 1967年に 207 頭を捕獲している。アイスランドの西岸にある基地では、4 隻の捕鯨船が 119 頭のマッコウクジラを捕獲した。フェロー（Faerous）島においては 1957年に 141 頭を捕獲したが、その捕獲頭数は除々に減少し、1966 年には 1 頭までとなった。そして、1967年には操業を中止している。ブラジルでは 1967年に 20頭のマッコウクジラを捕獲した。

インド洋岸におけるナタールの沿岸基地では、1965年までマッコウクジラの捕獲は毎年増加しており、2,814 頭が 12 隻の捕鯨船により捕獲された。その翌年から捕獲頭数は減少しはじめ、1967 年にはわずか

1,626 頭の捕獲であった。インド洋南東部のオーストラリアでは、アルバニーを沿岸基地として 3 隻の捕鯨船がオーストラリア大湾（Great Australian Bight）において操業している。

南極海のヒゲクジラ捕獲制限以後、特に、この沿岸沖で越冬したザトウクジラの資源が枯渇してきて、オーストラリアはマッコウクジラの捕獲を開始し、1964年までの捕獲頭数は 710 頭（1955年におけるマッコウクジラの捕獲はわずか 7 頭）に達した。そして 1967年には同基地で 506 頭のマッコウクジラが捕獲された。

また、1964年にはインド洋の高緯度水域で操業した 9 船団（4 船団はソ連、5 船団は日本）は、マッコウクジラを 2,095 頭捕獲した。さらに、1964年には日本の 2 船団が太平洋の南方海域で 1,779 頭のマッコウクジラを捕獲し、またインド洋の 40°S 以北の海域においてソ連船 1 船団と、ノルウェー船 4 船団により 442 頭のマッコウクジラが捕獲されている。

統計上の資料では、世界で沿岸捕鯨が行われているほぼ全ての水域において、1)沿岸基地の数 2)捕鯨船の隻数 3)マッコウクジラの捕獲頭数（およびその発見頭数においても）などの減少を示している。

南極海のマッコウクジラを対象とした捕鯨は、かなり重要となって続き、そして、この海域における捕獲頭数は、1 漁期 4,000 頭以上に達している。第 2 表に南極海で近年操業した捕鯨船団の構成を示した。

第 2 表 1961—1968 年度南極捕鯨における船団構成

国 名	1961/62		1962/63		1963/64		1964/65		1965/66		1966/67		1967/68	
	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数	船 団 数	捕 鯨 船 隻 数
日 本	7	85	7	79	7	73	* 7	71	5	52	4	44	4	43
ノルウェー	7	71	4	32	4	33	4	36	2	21	2	21	1	5
ソ 連	4	67	4	70	4	68	4	65	3	55	3	55	3	49
イギリス	2	22	1	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オランダ	1	15	1	11	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	21	260	17	201	16	190	15	172	10	128	9	120	8	97

*) 1 船団は南極海におけるマッコウクジラ操業は実施していない。

南極海域におけるマッコウクジラの最大捕獲頭数は、1963—64年度漁期に母船式により 6,651 頭を記録したが、その 50% 以上はソ連船団により占められていた。その後、1966—67年度漁期における捕獲頭数は減少し、4,960 頭であった（操業に従事した国は 3 ヶ

国）。ソ連船団により南極海で捕獲されるマッコウクジラの頭数は毎年増加し、この海域で世界各国により捕獲される頭数の 80% を占めている。また、南極海の基地捕鯨は 1966—67年度漁期までサウスジョージア島で 1—2 の基地において操業していた。そして、1965

～66年度漁期には17頭のマッコウクジラを捕獲した。(その翌年基地では、マッコウクジラの捕獲を中止した)。

南極海におけるマッコウクジラの捕獲は、主な対象鯨種となっていたヒゲ鯨の資源量が減少したため拡大した。英国およびオランダによる捕鯨の中止と同じく、南極海に出漁した船団数の漸減は、ヒゲ鯨捕獲頭数の減少により説明される。

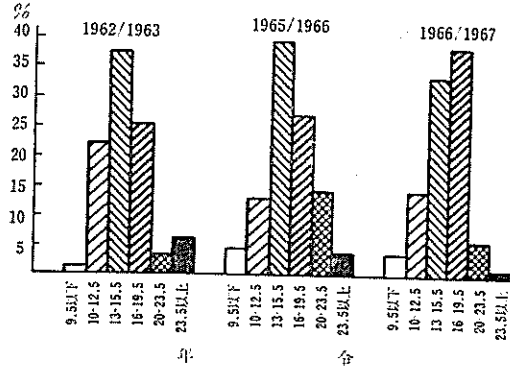
マッコウクジラの捕獲頭数増加でその体長は低下した。すなわち、南極海で捕獲されたマッコウクジラの平均体長を第3表に示した (Jonsgard, 1960 : IWS)。

第3表 南極海産マッコウクジラの平均体長

漁 期	体長(m)	漁 期	体長(m)
1937/38	16.2	1957/58	14.5
1938/39	16.1	1958/59	14.4
1946/47	15.3	1959/60	14.4
1947/48	15.5	1960/61	14.3
1951/52	15.2	1961/62	14.1
1952/53	15.2	1962/63	14.2
1953/54	15.0	1963/64	13.8
1954/55	14.9	1964/65	13.9
1955/56	14.7	1965/66	13.8
1956/57	14.8		

南極海におけるマッコウクジラの群れの状態で捕鯨の結果を分析した Jonsgard は、大型 (15m以上) マッコウクジラの割合は除々に減っており、小型 (15m以下) マッコウクジラの割合は増加していることを指摘している。すなわち、例をあげると1948—1949年度漁期における大型オスの割合は64%を呈していたが、1958—59年度漁期にはわずかに16.5%であった。さらに、Jonsgard は、ノルウェーにおける捕鯨の資料により、クジラの平均体長が捕獲月と漁場の地理的位置との間には関係のないことを報告している。しかし Kirpichnikov (1950) によれば、このような関係が認められることを報告している。

“ソビエツカヤロシヤ”号により1962—1967年度漁期に捕獲されたマッコウクジラのオスの年令査定結果には (第2図)、現在までのところ資源の状態に顕著な悪化傾向は認められない。南極海のマッコウクジラのオスの平均年令は、1966—67年度漁期には13—15才であった。それにもかかわらず、若年級鯨の捕獲頭数は一定の増加率を呈し、そして高年級鯨は3.5分の一の減少を記録している。北太平洋と南極海で捕獲された鯨の年令組成を比較してみると、南半球における群



第2図 “ソビエツカヤロシヤ”号により南極海において1962—1967年度漁期に捕獲されたマッコウクジラのオスの年令組成

構成が良好な状態にあることを示している。捕獲鯨の平均体長の低下は、小型鯨が生息している低緯度海域で、強度の捕鯨が行われるようになったことが指摘されよう。これは年令組成も同様に若年化傾向を呈している。

南極海における1966—1967年度漁期および南極海以外における1967年度漁期においては、12ヶ国 (16船団、26沿岸捕鯨、25隻の捕鯨船) が25,921頭のマッコウクジラを捕獲し、その50%以上 (14,775頭) がソ連船団により捕獲されている (IWS)。

なお、ソ連以外の国別捕獲頭数は次の通りである。

日 本	6,007	ポルトガル	395
南 ア 連 邦	2,256	カ ナ ダ	306
ノ ル ウ ェ ー	617	ア メ リ カ	100
オーストラリア	586	ブ ラ ジ ル	20
チ リ	533		

北方水域および南方水域 (約 50°S 以南) において比較的経済価値の高いオスのマッコウクジラは、大規模操業の対象となり得る。

マッコウ捕鯨

現代の捕鯨技術をもってすれば、マッコウクジラの捕獲はほとんどのひげ鯨に比較して容易のようである。すなわち、マッコウクジラは他の鯨に比較し、概して動きがにぶく、さらに敏捷性および機敏性に欠け、そして特に長時間潜水して浮上した場合の浮上時間は長い。捕獲後のマッコウクジラは例外なく、他の鯨種も同様であるが、コンプレッサーで体内に空気を注入する。18世紀および19世紀における捕鯨ではマッコウクジラが捕獲されたが (ナガスクジラの類は捕獲

しなかった)、このクジラやセミクジラは死後沈降しないと考えられていた。現在ではマッコウクジラは死後沈むと考えられており、確かにその何頭かは沈降し、また脂肪の少ない若年鯨は沈んでいる。

アゾレスとマディーラでは 100 年前とはほぼ同様な装備と方法でマッコウ捕鯨が今なお行なわれている海域であり、この興味のある、そして現在の常識では考えられないような捕鯨法については、もう少し詳しく述べる価値があろう。

この水域における鯨の見張りは、一年中夜明けから夕暮れまで崖の上にある沿岸の見張り所で行なわれている。そして鯨の潮を発見すると、白い旗とロケットがあげられて鯨の発見を知らせることになっている。すると、まず 10.5—11.5m の長さで 6 組のオールを有する 7 人乗り組みのボートが海へ漕ぎ出される。

捕鯨船に当るこの手漕ぎボートは、モーターボートで鯨の近く（1 哩以内）にまで曳航される。そして、モーターボートは捕獲作業中乗組員が海中へ投げ出されるような事故がひんぱんに起るために行う救助活動以外には、曳航作業が主な任務となっている（Clark

1953）。

マッコウクジラに目の前迄に近づいた時は、鯨打ちはボートのへさきにかがみ、そして、ボートがクジラの数メートル内に近づいた時（時にはへさきに鯨が衝突することもある）、鯨打ちは腕をあげて木の棒に鍛鉄できている長さ 3 m の鉋を投げる。投げられた鉋で傷をうけたマッコウクジラは、それから花卉の断面のように先が 2 つに分かれた型状の鉋先を有する、長さ 1.5m の鉋に長さ 2 m の棒をとりつけた全長 3.5m のヤリでしとめられる。このようにして行なわれるアゾレスおよびマディーラの捕鯨は、狩猟よりも原始的な方法が用いられている。ある基地では、鯨を海岸の上に回転させながら解剖するところもあり、そして切り取られた脂肪層は煮釜で煮熟される。

このように、アメリカ式捕鯨時代を思い出させるような鯨取りが現に行なわれている。ただ、モーターボートやラジオおよび点在する鯨の見張り番屋の間の連絡をとる電話が、ハーマンメルヴェイルによる“白鯨”又は、スコレスビー船長時代の捕鯨と違うのみである。

1976/77 漁期南氷洋捕鯨捕獲頭数

	Sei	Bryde's	Minke	Sperm
October	-	45	-	-
November	-	75	1,736	2
December	546	-	146	25
January	583	-	-	28
February	108	-	2,068	51
March	-	105	-	128
Total	1,137	225	3,950	234

せ た し あ

3 月 12 日に開かれた日本学士院の総会において、当研究所大村秀雄所長と琉球大学西脇昌治教授が「鯨類の資源生物学的研究」で日本学士院賞を受けられることに決まりました。

大村所長と西脇教授の長年の鯨類研究における功績が認められましたことは、暗いニュースの多い昨今の鯨界にとりまして大きな喜びでした。（佐竹）

ぶ っ く す

- 10) Watkins, W.A. and W.E. Schevill, 1977. Spatial distribution of Physeter catodon (sperm whales) underwater. Deep-Sea Research, 24(7):693-699.
- 11) Husar, S. L. 1977. Trichechus inunguis. Mamm. Species, 72: 1-4.
- 12) Donkin, P., S.V. Mann and E.I. Hamilton, 1977. Microcoulometric determination of total organochlorine pesticide and polychlorinated biphenyl residues in grey seal (Halichoerus grypus) blubber. Analy. Chimica Acta, 88: 289-301.
- 13) van Bree, P.J.H. 1977. On former and recent strandings of cetaceans on the coast of the Netherlands. Sönderdrunkaus Z.f. Saugetierkunde Ed. 42(2):101-107.
- 14) Barham, E.F., W.K. Taguchi and S.B. Reilly. 1977. Porpoise rescue methods in the yellowfin purse seine fishery and the importance of medina panel mesh size. Marine Fish. Review, 39(5):1-10.
- 15) Thompson, R.K.R. and L.M. Herman, 1977. Memory for lists of sounds by the bottle-nosed dolphin: convergence of memory processes with humans ? Science, 195(501-502).
- 16) Domning, D.P. 1977. Observations on the myology of Dugong dugon (Muller). Smithsonian Cont. Zool. 226:1-56.
- 17) Addison, R.F. and P.F. Brodie, 1977. Organochlorine residues in maternal blubber, milk, and pup blubber from grey seal (Halichoerus grypus) from Sable Island, Nova Scotia. J. Fish. Res. Bd. Canada, 34(7):937-941